

日本語教育を充実させて、産業界で活躍できる留学生を育てる試みも始まった。

「もの作りの現場は、工夫がいっぱいです」と。名古屋工業大学大学院修士2年のグエン・クイ・クインさん(25)は目を輝かせる。

同大が中小企業の中堅社員向けに開く「工場長養成塾」に参加。40〜50歳代の社会人と一緒に、豊田自動車機囑託の川口勉さん(64)

の指導で地元企業の製造現場を巡りながら、整理、整頓を徹底して問題点を浮き彫りにするトヨタ式の「カイゼン」を学ぶ。

クインさんはハノイ工科大学卒業後、来日して2年だが、日本語で積極的に質問し、レポートもこなす。「日本の自動車産業で働きたい」と夢を膨らませる。



工場の現場で「カイゼン」を学ぶクインさん(左)

## 産学連携で教育の試みも

川口さんは「非常に熱心で吸収も早い。もの作りを支える品質管理の神髄を伝えたい」と目を細める。

クインさんは、経済産業省と文部科学省が始めた研修プログラム「アジア人材資金」の第2期生。特に日本語に力を入れ、自己紹介や報告書

の書き方など実践的な日本語を修士課程の2年間、徹底して鍛える。

受け入れ先の全国21大学・9地域は、それぞれの特徴を生かして専門教育を行い、就職を支援する。名工大は、トヨタ自動車やデンソーなど自動車産業と連携。夏休みに企業実習を体験させ、一線の技術者に現場のノウハウを講義してもらう。

名工大の1期生4人は今春、自動車関連企業に全員就職した。しかし、経済危機の影響もあり、12機の影響もあり、約7割にとどまった。

経産省産業人材政策室の新川達也室長は「留学生が国内で就職して活躍できる仕組みを作り、優秀な人材が集まる好循環を生み出したい」と話している。